

【研究ノート】

## 英語の語形成と複合についての考察

中 屋 晃

## 研究ノート

## 英語の語形成と複合についての考察

中 屋 晃

Akira NAKAYA

## 目次

1. はじめに
2. 連結形と混成語について
3. 語形成について
4. 動詞中心の複合語について
5. おわりに

## [Abstract]

## English Word-formation and Compounding

This paper examines the formation of compounds using various methods, which include affixation, compounding, and conflation. Take the word *church-goer* as an example. This compound illustrates conflation by simultaneously combining two word-formation templates (one each for affixation and compounding). Starting with a theoretical issue of the close relationship of compounding to syntax, the focus shifts to specific issues, such as combining forms, blends, deverbal suffixes, and verb-centered compounds. Endeavors are also made to elucidate the argument structures of compounds and classify verb-related compounds. Toward the end, the study argues that a considerable knowledge of word-formation and compounding helps enhance the understanding of technical texts in English.

## 1. はじめに

英単語を覚える効果的な方法として、語源を調べるとともに、単語がどんな要素で構成されているかを分析することが考えられる。ここでさらに一歩進めて、複数の語基あるいは連結形が結びついてできる複合語を調べるのも有効であろう。複合語の定義については見解が分かれるところではあるが、幾つかに分類して扱うことで理解が深まる。そこで本稿においては、語形成と複合について語彙学習の観点から注目すべきポイントをまとめることとした。特に、語形成については連結形 (combining form) を、複合語については総合複合語 (synthetic compound) を中心に取り上げることとする。

英文法における複合語の扱いについては、形態論と統語論のどちらに位置づけるべきかという議論がある。形態論に含めるべき根拠として、Bauer (2003: 135) は次の二つを挙げている。

- 1) 派生と同様に複合語形成は新たな語彙を生み出すものであるから、例えば hedgehog のように、まとまった構成要素全体で一つの語の単位として母語話者には認識されている。
- 2) 派生語と同様に複合語は物、属性、活動に名称を与えるもので、統語論的な機能となる描写を与えるものではない。例えば派生語 judoist と複合語 judoman は柔道家を意味する名称であって、an expert in judo のような統語的描写を提

---

キーワード：語形成、複合語、派生

Key words：word-formation; compound; derivation

供する語句ではない。

一方、複合語形成は統語論と密接な関係にあるとする論拠として、Bauer (2003: 135-137) は以下の五点を挙げている。

- 1) 複合語はそもそも語彙素の結びついたもので、それら要素の配列は統語論として扱える。
- 2) 複合語の中には形として普通の語句と見分けがつかないものもあり、複合語とは認識されずに必要に応じて造語され、時をおかずに忘れ去られてしまう場合がある。そうした複合語の語句の中には統語論的な分析が可能なものもある。
- 3) 「名詞＋名詞」型の複合語は形態論の一部として、また「形容詞＋名詞」型の複合語は統語論の一部として伝統的に見られてきたが、これら二つのタイプの関係性が一般にはまだ十分に見られていない。
- 4) 「名詞＋名詞」配列と「所有格の(代)名詞＋名詞」配列が同じ意味の複合語となる場合、前者が形態論の一部として、後者が統語論の一部として通常は見なされるが、この両者についても十分な関係性が要する。一般的にそのような有契的な基盤が欠けている。この両者は恐らく同じ種類の構造を持つという可能性は残っている。そして、それは形態的というよりは統語的な構造であろう。例えば、ページの耳折れを意味する dog-ear と dog's-ear とか、千鳥格子を意味する houndstooth と hound's tooth が関係の並列性を示してくれる。
- 5) 前置詞を作る派生接辞は存在せず、従って派生により作られる前置詞はほとんど見つからない。一方、複合前置詞であれば onto, into, because of など、普通に見かける。このことは、派生語は形態論で、複合語は統語論で扱うことを暗示している。

以上の論点から判断すると、複合語形成については派生形態論というよりもむしろ統語論により密接に結びついていると考えられる。しかしながら、これらの論点のどこに相対的な重点を置くかによって、複合語をどちらの観点から分析するかが決まる。また、複合語の分析には語源の情報が不可欠で、その知識がなければ、例えば前置詞 despite を派生語ではなく複合語と見なす恐れがある。なお、現在の理論では複合語形成はほとんどの場合において形態論に位置づけられている。

本稿では動詞的構成要素を含む複合語を扱うが、主に形態論の視点から構成要素のつながりと意味関係を見て複合語を整理することにする。

## 2. 連結形と混成語について

寺澤 (2002: 108) によれば、連結形とは本来は独立語としては用いられない構成要素で、常に他の要素と結びついて合成語 (compound) や派生語を形成するものである。ギリシャ語やラテン語系に由来するものが多く、接頭辞や接尾辞よりも具体的な意味を持ち、連結形は拘束異形態 (bound allomorph) でもあるという。連結形の具体例としては、語基の語頭に添加される anti-, astro-, bio-, geo-, hetero-, photo-, philo-, socio- とか、語基の語尾に添加される -graph, -morph, -naut, -logy, -ology などがある。astrology のように前部連結形 astro- と後部連結形 -logy のみで形成される新古典複合語 (Neo-classical compound) もある。一方、cyber- や hemi- は接頭辞であり、-less, -logue, -ward のように連結形に見えて接尾辞であるものもあるので注意が必要だ。また、連結形は他の連結形や、接辞、特に接尾辞と連結することも可能であるとしている。例えば、absent-mindedness では連結形 -minded に接尾辞

-ness が結びついている。

拘束形態素 (bound morpheme) として用いられる bio-, geo-, -logy のような新古典要素は接辞なのかという問題がある。Plag (2003: 74) によれば, biology, geology のような新古典要素のみで成立する語が存在することから, これらの連結形は複合語の構成要素となれる形態素で, 語形成上は接辞添加 (affixation) というよりもむしろ合成 (compounding) に使用されるとみなすのが妥当であるとしている。従って, 合成に用いられて新たな単語, ここでは複合語を作るのであるから, 新古典要素は語根 (root) であると見なすことができる。<sup>(1)</sup>

形態的な問題を論ずるよりも, 形式的な特性から語を分析する方が分かりやすい場合がある。この点を混成語 (blend) で見てみよう。類似した二つの語からそれぞれの一部を取り出して両者を結びつけることにより, それぞれの意味を合わせ持つような新語が形成されることがある。このような操作により生み出されるのが混成語で, 一時的に使用されて消えていくものもあれば, 語彙項目として定着するものもある。混成語はかばん語 (portmanteau word) とも呼ばれており, 2語の部分が結び合わさって1語となり, あたかも旅行かばん (portmanteau) の中に2語の意味が詰め込んであるかのような状態であることを Lewis Carroll が作品 *Through the Looking-Glass* の1節で指摘したことに, かばん語の名称は由来している。Plag (2003: 125) によると, 混成語は意味的・統語的には連結複合語 (copulative compound) のように振る舞い, 音韻体系の特徴として次の三つの条件が挙げられるという。一つ目は第1の語の始まり部分と第2の語の終わり部分が結びつくということ, 二つ目は音韻として結びつくのは分節音 (具体的には頭子音, 核音, 語末子音, 韻, あるいは音節そのもの) であること, 三つ目は混成語の音節数は第2の語

に合わせて決まること。

Plag (2003: 122) は混成語を二つのタイプに分類している。一つ目のタイプは, bit (< binary + digit ), Eurasian (< European + Asian ), motel (< motor + hotel ), sci-fi (< science + fiction ) などのように, 第1要素が第2要素を修飾するような意味を持つ混成語である。二つ目のタイプは, boost (< boom + hoist ), brunch (< breakfast + lunch ), chunnel (< channel + tunnel ), smog (< smoke + fog ) などで明らかのように, 第1要素の特性と第2要素の特性が重なり合った意味を引き継ぐ混成語で, actor-director (俳優兼監督) のような二つの構成素の関係が対等な連結複合語 (copulative compound) に似ている。二語の意味を合わせ持つという点で, 二つ目のタイプが本来の混成語である。一方, 一つ目のタイプは混成される元の二語をそのまま並べても複合語として成立するものであり, 単なる複合語の短縮形に過ぎない。通常, 混成語は一つの単語の最初の部分ともう一つの単語の最後の部分を取って形成されるが, sci-fi について言えば science と fiction 両方の単語の最初の部分からできているので, この規則の例外となる。

Bauer (1983: 234-36) によれば, 混成語の範囲は明確に規定されておらず, 混成語のように見えても, それが実は合成であったり, 新古典接辞合成, 接辞添加, 省略 (clipping), 頭字語 (acronym) であったりするという。

ここで改めて連結形をより広い意味で捉え直してみる。連結形を厳密に定義すればギリシャ語やラテン語系に由来するものに限定されるのだが, 本来は形容詞となる -eyed, -minded, -sided などのような名詞に屈折接尾辞 -ed が付いたものも連結形あるいは連結要素の名称で見出し語として載せている英和辞書がある。これは英語学習者に配慮した扱いであり, 連結形を広義で解釈したものと

える。英和辞典からそのような連結要素と結びついた複合語を探すと様々なものが見つかる。例えば以下のようなものである。

[精神・身体・生物に関連するもの]

open-minded, full-bodied, broad-shouldered, shallow-brained, loud-mouthed, long-nosed, dull-eyed, quick-eared, light-footed, light-fingered, empty-handed, stiff-necked, gray-haired, red-faced, cool-headed, cold-hearted, cold-blooded, back-boned, long-tailed, long-finned, single-celled

[その他]

long-sleeved, cream-colored, twin-bedded, tight-belted, fine-grained, stone-roofed, full-sized, music talented, two-tiered

これらの複合語はすべて複合形容詞として分類されるべきものである。特徴としては主要部に屈折接尾辞 -ed が付くことで動詞中心の統語構造を示す。

### 3. 語形成について

複合語が形成される過程は、新語が生まれるのと状況が似ている。Bauer (1983: 43) によると、新聞の見出しなどによく見られるのだが、スペースを節約するために、例えば freedom of the press と書く代わりに press freedom が使われるようになってきたという。同様に、freedom of speech に代えて「名詞+名詞」型の複合語 speech freedom あるいはより一般的な「形容詞+名詞」型の free speech が確立している。確かに、ある概念を簡潔に述べる表現があれば便利である。土家 (1984: 146) は、「句で表現したり、関係代名詞を用いて冗長になるところが、複合語だとびしっときまることが多い」と指摘している。ある言葉が誕生し、広く世間に受け入れられるようになった段階で、それは新語あ

るいは複合語として定着したと言えるであろう。

確立した複合語については、母語話者は通常それを構成する形態素とか接辞を意識することなく使用しているが、外国語学習者は意識的に複合語を捉えなければならない。例えば、freeze-dry, treasure hunt, transit visa, freeway, express mail などでは、語基の意味を調べた上で、複合語の意味をつかむ時間が普通の学習者には必要だ。pick-pocket とか turn-coat などの外心複合語となると構成要素だけからの類推では意味の把握は困難である。辞書を調べて pick が「盗む」、turn one's coat が「裏切る」という意味であることを知らなければならない。さらに、pick-pocket が「スリ」、turn-coat が「裏切り者」であることを頭の中で即座にイメージできなければ習得のレベルに達したとは言えない。

複合語については、構成要素が組み合わせられて、複数の意味が生じるという問題がある。語彙化された複合語であれば辞書とか文脈から意味を特定できるが、そうでない場合はその複合語の文法項 (argument) の結びつきがどうなっているかを分析する必要がある。ここでの文法項あるいは項というのは、複合語の主要部が関係を持つ要素のことで、主に第 1 要素の位置に存在する。例えば、複合語 cotton candy であれば、「綿菓子」という解釈は容易だが、外心複合語としての「魅力的だが中身のないもの」という意味は文脈があっても理解するのが難しい。普通の学習辞書では後者の意味は載っていない。ただし、大型の英語辞書 *Oxford Dictionary of English* であれば、見出し語 candyfloss の定義から「中身がないと見なされるもの (something perceived as lacking in substance)」という意味が見つかる。さらに、この辞書には Their music is just aural candyfloss. という例文があり理解を助けてくれる。この例文で candyfloss を cotton

candy に置き換えて複合語の文法項 cotton から「ふわふわしていて大きいが中身はない」という意味にたどり着けるかは疑問だ。複合語の中でも「名詞 (N)+名詞 (N)」型のものは要注意である。

複合語は単に語彙化されるばかりでなく、特定の概念を言語化するものである。Schmid (2011: 143) は、N+N型の barman を例に、個々の要素 bar と man だけでは表現できない情景、すなわち「カウンターの後ろに立ってグラスにカクテルを注ぎ客に提供する雰囲気」までも伝えてくれるのが複合語の持つ働きだという。

語彙の習得に役立つのが派生語の知識である。様々な単語が派生により生成されてきた。接頭辞 dis- について言えば、動詞に付く例として discover, dissociate, displease, dissuade, discharge などが、名詞では disinformation, disability, displeasure, disorder, disfluency などが、また形容詞では disproportionate, disloyal, dishonest, dismal, dispassionate などがある。dis- には幾つかの意味があり、その知識が単語の理解を深めてくれる。discover であれば、「覆い隠す (cover)」に「動作の反転 (dis-)」が加わって「おおいを剥ぐ → 発見する」となる。

次に、派生語の構造について見てみる。接頭辞 un- と接尾辞 -ability が付いた単語 ungovernability の生成過程は、第1段階で仏語由来の動詞 govern に名詞を形成する接尾辞 -ability が添加され、第2段階で否定を意味する接頭辞 un- が付くということになる。従って、この単語の構造は、[un-[[govern]<sub>v</sub>-ability]<sub>N</sub>] と表記できる。この分析のポイントは governability (統治可能状態) を否定して ungovernability (統治不能) が生成されるということだ。

同じような形式の派生語に見えても、その内部構造が異なるものがある。例えば、

aniti-abortionist (中絶反対主義者) と pseudo-abortionist (人工中絶権ニセ支持者) の二つの造語<sup>(2)</sup>について分析してみよう。両方で共通している部分は abortionist だが、前者において接頭辞 anti- は主要部の abortion に添付している一方で、後者において連語形 pseudo- は abortionist を修飾している。両者の内部構造は異なっており、antiabortion が「中絶反対の」の意味を持つものに対して、abortionist は「人工妊娠中絶医」あるいは「妊婦の人工中絶権支持者」を意味する。造語構造は、[[anti-[abort-ion]]-ist] と [pseudo-[[abort-ion]-ist]] で示すことができる。

接頭辞 un- には「動作反転」と「否定」の意味がある。このことを踏まえた上で、派生語 unzipped の持ちえる意味を検討すると、一つは「(結んだものが) ほどいた」という意に、もう一つは「(ファイルが) 圧縮されていない」という意になる。前者の解釈では動詞 zip の動作「締める」がすでに生じているという前提が、後者の解釈では動作「圧縮する」が起きていないという前提が必要だ。この両義性を構造で示すと [[un-zip(p)]ed] と [un-[zip(p)-ed]] となる。

別の派生語 unwashed ではどうであろうか。Aronoff & Fudeman (2011: 128) によれば、unzipped のような両義性は見られないという。なぜなら、何かを unwash することができないからだ。unwashed の構造は [un-[wash-ed]] となり、意味するのは「洗っていない」ということで、washed「洗ってある」を否定する派生語となっている。さらに unraveled についても解説があって、この派生語は [[un-ravel]-ed] という形態構造を持ち、「ほどけた」という意になり、[un-[revel-ed]] で「もつれた」という意にはならない。つまり、unzipped のような両義性を有してはいないということだ。これは ravel と unravel が同義で、両方とも「ほぐ

れる」を意味することの帰結となる現象だと言える。

派生語は必ずしも辞書に載っている訳ではないという根拠が、母語を獲得する過程からうかがえると述べて、Aronoff & Fudeman (2011: 115-6) は二歳から五歳にいたる子どもが品詞転換 (conversion) により臨時語 (nonce word) を使用した以下の例をClark (1995: 402) より引用している。例文括弧内は (年: 月) で子どもの年齢を示す。

- Don't **hair** me. (2: 4)  
**Rocker** me, mommy. (2: 6)  
 I **broomed** her. (2: 7)  
 I'm **lawning**. (2: 9)  
 I'm **supermanning**. (3: 0)  
 I guess she **magicked**. (3: 3)  
 We're gonna **cast** that. (4: 0)  
 Is Anna going to **babysitter** me?(4: 0)  
 We already **decorated** our tree. (4: 11)  
 Will you **chocolate** my milk? (5: 0)

これらの臨時語の使い方は、子どもたちの成長に伴い忘れ去られるという。また、大人でもあまり考えることなく臨時的に名詞を動詞に転換して使用することがあるという。

#### 4. 動詞中心の複合語について

複合語の主要部 (head) が動詞由来の要素であるものを動詞由来複合語 (verbal compound) あるいは総合複合語 (synthetic compound) という。特に N+V タイプのものは名詞編入 (noun incorporation) が生じたとされる。この名詞 (N) は動詞 (V) に組み込まれ、動詞の文法項 (argument) となるものである。動詞由来の要素としては、動詞に接尾辞 -ed, -ing, -er が付くものがある。

ここでは、動詞に接尾辞 -er を添加することにより派生した peacemaker (調停者), stakeholder (利害関係者), landowner (地

主) などの総合複合語について見てみよう。これらの語については二通りの分析が可能である。動詞由来の名詞 maker, holder, owner を主要部として、その前の名詞 peace, stake, land と連結した「N+N」型の複合語であるとするのが一つ目の分析方法である。二つ目は、動詞由来複合語 peacemaker, stakeholder, landowner に接尾辞 -er を添加することにより派生したとする分析の仕方である。しかし、この方法では前提となる「N+V」型の複合語が語彙項目として確立されておらず、問題が残る。さらに大きな形態構造に組み込まれ peacemaker, stakeholder, landowner のような動作主名詞となって初めて容認可能となる。このように、派生 (derivation) と合成 (compounding) の両方を同時に使うことにより生み出される複合語を示す用語として総合複合語 (synthetic compound) が伝統的に使われてきた。

英語では動詞由来の複合語形成は生産性が低く, peacekeep, stockhold, land develop などのような複合動詞は認容不可である。ただし, 例えば接尾辞 -ing, -er, -ment を付けて peacekeeping (平和維持), stockholder (株主), land development (土地開発) とすれば, 複合語を完成することはできる。二つ以上の語基が合成して動詞となる複合語を「複合動詞」と呼ぶのだが, 語彙項目として確立したものは少ない。例としては, babysitter からの逆性 (backformation) でできた babysit とか, 名詞 honeymoon (新婚旅行) から動詞への転換 (conversion) で生成された honeymoon (新婚旅行をする) とか, 「副詞+動詞」型の複合動詞 outreach, overpay, underperform などがある。

派生と合成で生み出される動詞由来の複合語には, fast-growing (急成長を遂げる), close-set (隙間なく並んだ), newfangled (最新流行の) など「形容詞+分詞」型となるもの, あるいは hair-raising (身の毛のよだつ

ような), state-owned (国有の), handwritten (手書きの) など「名詞+分詞」型となるものも見られる。これらは複合分詞形容詞 (compound participle adjective) と呼ばれる。いずれも主要部に動詞由来の形容詞が来ている。

一方、主要部が名詞に屈折接尾辞 -ed が付いた形の複合分詞形容詞となる非総合的複合語というものがある。independent-minded (独立志向の強い), heavy-handed (威圧的な), cherry-tree-lined (桜並木の), flower-decked (花で飾り付けた), baby-faced (童顔の) などがその例である。Booij (2012: 93) では、blue-eyedを例にして、名詞 eye から派生した複合分詞形容詞 eyed が形容詞 blue と融合した「形容詞+分詞形容詞」型の複合語 blue-eyed (ただし、第2要素の eyed は単独では使用不可) とする分析、あるいは「形容詞+名詞」型の複合語 blue-eye に屈折接尾辞 -ed を添加したとする分析の二通りのパターンが示されている。しかしながら、普通 eyed は単独形容詞としてではなく、複合語でのみ使用されること、blue eye そのものは複合語ではなく、単なる句であること、などが問題として残る。

この問題を Scalise and Bisetto (2009: 53) は green-eyed を例にして取り上げている。つまり、green-eyed は合成と派生が同時に生じた並置総合 (parasyntesis) であっても、eyed が単独の形容詞としては存在しないので「形容詞+形容詞」型の複合語だとは認められないことと、また green eye が複合語ではないので屈折接尾辞 -ed を付けた green-eyed は派生複合語とは見なせないことの二点を指摘している。さらに、同じように第1要素が第2要素を修飾する関係にある greybeard (老いぼれ) のような外心複合語についても比較分析している。greybeard は、ある特性を有する having 「(白髭)を持つ」という意味を伝えるゼロ形態素を持つと分析

できるので複合語だと見なせる。また最近の用語を使えば、所有関係を示すゼロ接尾辞 (zero suffix) により「白いあごひげをはやした人」へと名詞化されたとも言える。green-eyed と greybeard のどちらの場合においても、同じタイプの並置総合による語形成が生じており、違いは一方では主要部に屈折接尾辞 -ed があることで派生の存在が明確となるが、他方では仮定の無形要素が付くことで生じるゼロ派生 (zero-derivation) なので派生の存在が不明確となるということだ。いずれの場合においても明確な要素あるいは不明確な要素の存在が複合語を形成していると言える。

次に、動名詞が複合語の主要部となる場合について見てみる。sightseeing (観光), mountain-climbing (登山), grocery shopping (食料品の買い出し) など主要部が動名詞となる複合語は動詞の定形としては使えない。つまり、see, climb, shop などの動詞は名詞編入 (noun incorporation) により sightsee, mountain-climb, grocery shop などの複合語にできるが、実際に使用する場合には慣用化した活動を表す動詞 sight-see として使用するよりも、別の動詞 go の補語として使用するのが普通である。

- a) ?I sightsaw the city.
- b) I went sightseeing in the city.

なお、これら複合語の第1要素 sight, mountain, grocery は特定のことを指すわけではなく、総称的な名詞として使われている。

Lieber (2016: 53) によると、動詞あるいは前置詞を使った複合語の形成は困難であるとされる。特に、「名詞+前置詞」型と「動詞+形容詞」型の複合語は極めて少ない。この組み合わせで示されるのが、year-in, year-out (絶え間なく), go-slow (緩慢な), fail-safe (安全策を講じた) などだ。

動詞を含む複合語に限定すると、他に「動



詞+前置詞」型 (breakdown, buydown, putdown, push-up, rip-off), 「動詞+動詞」型 (blow-dry, freeze-dry, make-believe, stir-fry, dry-clean, drink-drive), 「名詞+動詞」型 (brainwash, machine-wash, babysit), 「形容詞+動詞」型 (cold-call, hot-swap, hot-wire, whitewash), 「前置詞+動詞」型 (download, downgrade, outsource, underlie, undermine, undergo, upset), 「動詞+名詞」型 (pickpocket, think tank, pull date, cutpurse, cut-throat, burn bag, killjoy, makeshift, glowfly, pushcart, stoplight, stopgap) が挙げられる。この複合語タイプで使われている「前置詞」は機能的には「副詞」であるが, Bauer et al. (2013: 452) でも形として直感的に分かり易い前置詞という名称で分類に使用している。

## 5. おわりに

本稿では合成と派生による語形成と動詞中心の複合語について論じてきたが, まだ十分に役立つ分析とはいえない。複合語は絶えず新しいものが作られており, 語彙項目として定着するものもあれば, 忘れ去られるものもある。その時々必要に応じて母語話者が作る複合語の中には理解が困難なものも多い。イギリス英語でもアメリカ英語でも複合語が盛んに使われている。例えば, 英国の経済誌エコノミストの社説 (*The Economist* October 1<sup>st</sup>-7<sup>th</sup> 2022 p.10) から探すとおよそ52個の複合語が見つかる。形容詞をA, 名詞をN, 動詞をV, 前置詞をPとして, その組み合わせで分類したものを以下に示す。

### [A+A]型

long-dated	「長期の」
long-standing	「長期にわたる」
lukewarm	「不熱心な」

### [A+N]型

economic growth	「経済成長」
financial market	「金融市場」
public finance	「財政」
emerging market	「新興市場」
prime minister	「首相」
foreign currency	「外貨」
central bank	「中央銀行」
imported inflation	「輸入インフレ」
blind conviction	「盲信」
flat-earthier	「平らな地球信者 (誤った理論に固執する人)」
public mind	「世論」
public spending	「公共支出」
streamlined planning	「合理化計画」
fiscal sustainability	「財政持続可能性」

### [N+A]型

watertight	「完璧な」
growth-enhancing	「成長を高める」

### [N+N]型

tax cut	「減税」
energy bills	「エネルギー料金」
emergency spending	「緊急支出」
supply-side	「供給側の」
budget-busting	「財政破綻」
bond market	「債券市場」
gilt yield	「英国債利回り」
exchange rate	「為替相場」
stamp duty	「印紙税」
financial-services industry	「金融サービス業界」
housebuilding	「住宅建設」
growth agenda	「成長計画」
rate rise	「利上げ」
interest payment	「利払い」
policy stability	「政策の安定」
watchdog	「監視機関」
productivity rut	「生産性の停滞」
bonfire	「撤廃 (異質なものを処分するためのたき火)」

health care	「医療」
college opening	「大学開設」
growth plan	「成長計画」
mortgage payment	「住宅ローン返済」
market confidence	「市場の信頼」
income tax	「所得税」
investment incentives	「投資優遇策」
headline rate	「(細目を示さない) 総合レート」
corporation tax	「法人税」
emergency action	「緊急措置」
<b>[P+N]型</b>	
backdrop	「背景」
<b>[V+N]型</b>	
borrowing cost	「借入費用」
trading partner	「貿易相手」
think-tank	「頭脳集団」

**[V+V]型**

kickstart 「弾みを与える」  
 たとえ経済誌の1ページ分の内容であっても、金融・財政に関する複合語がたくさん見つかる。また、chancellor of the exchequer (財務大臣) とか balance-of-payments (国際収支) など語彙化された句にも注意が必要だ。それらの多くは基本的な専門用語と言ってもよい。英国トラス政権の経済政策がすでに暗礁に乗り上げたことを解説したものであるが、このような経済記事を読みこなすには、複合語に注目して辞書を使いこなす必要がある。つまり、個々の単語だけでなく、複合語や専門用語に目が向かなければならない。語彙化される前の複合語については、ネットでの検索が効果的である。ちなみに、英国の辞書出版社コリンズは、2022年の代表的な言葉として permacrisis<sup>(3)</sup> (permanent crisis 長期に及ぶ危機) を選んだ。2021年には頭字語 NFT(non-fungible token 非代替性トークン) が、また2020年には[V+P]型の複合語 lockdown (封鎖) が選ばれていることも検索で分かる。あらゆる機会を生かして専門

語でも複合語としてなじみあるものに転化できれば、英語の理解速度が向上するであろう。

**【注】**

- (1) Plag (2003: 135)を参照。
- (2) 辞書には派生や複合で生成されるすべての造語が載っている訳ではない。
- (3) permacrisis は permanent の前半部分と crisis を結び生成した新語で、かばん語 (portmanteau word) と称せられる。二つ目の crisis が省略なしにそのまま使われても、もう一方に省略があれば混成による生成であるといえる。

**【参考文献】**

Araki, K. (荒木一雄[編]) (1999). 『英語学用語辞典』. 三省堂.

Araki, K. and M. Yasui (荒木一雄・安井稔[編]) (1992). 『現代英文法辞典』. 三省堂.

Aronoff, M. and K. Fudeman (2011). *What Is Morphology?*. 2nd edition. West Sussex: Wiley-Blackwell.

Bauer, L. (1983). *English Word-formation*. Cambridge: Cambridge University Press.

Bauer, L. (2003). *Introducing Linguistic Morphology*. 2nd edition. Washington, D.C.: Georgetown University Press.

Bauer, L., R. Lieber, and I. Plag (2013). *The Oxford Reference Guide to English Morphology*. Oxford: Oxford University Press.

Booij, G. (2012). *The Grammar of Words*. 3rd edition. Oxford: Oxford University Press.

Clark, Eve V. (1995). Later lexical development and word formation. *The Handbook of Child Language*, eds. Paul Fletcher and Brian MacWhinnery, 393-412. Oxford: Blackwell.

Fernandez-Dominguez, J. (2009). *Productivity in English Word-formation*. Bern: Peter Lang

Huddleston, R. and G. K. Pullum (2002). *The*

- Cambridge Grammar of the English Language*.  
Cambridge: Cambridge University Press.
- Lieber, R. (2009). 'IE, Germanic: English', in R. Lieber and P. Stekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*. Oxford: Oxford University Press, Chapter 18.
- Lieber, R. (2016). *Introducing Morphology*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Plag, I. (2003). *Word-Formation in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985). *A Comprehensive Grammar of the English Language*. New York: Longman.
- Scalise, S. and A. Bisetto (2009). 'The Classification of Compounds', in R. Lieber and P. Stekauer (eds.) *The Oxford Handbook of Compounding*. Oxford: Oxford University Press, Chapter 3.
- Schmid, H. (2011). *English Morphology and Word-formation*. 2nd, revised and translated edition. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Terasawa, Y. (寺澤芳雄[編]) (2002). 『英語学要語辞典』. 研究社.
- Tsuchiya, N. (土屋典生) (1984) 「英語の語源」. in C. Imazato and N. Tsuchiya (eds.) 『英語の辞書と語源』. 大修館書店.